客づき合もすれども、五六十年前の獻立を、古き節用集の頭書から見出し、根來椀の堅き身上なりけるが、○略下

〔嬉遊笑覽器用二下〕根來は、そのかみよき朱ぬりを玄たる處なり、○略中根來山破られて後、薩摩の田代根古へ行たる者あり、彼處よりは朱出る故、緣ありて行たりけん、そこにて椀を作りて、塗たるもの多しとなむ、

〔三曉庵談話上〕一根來椀之事　御國○薩摩へ根來椀と申候て有之候、根來山破却已後、根來の者共、田代根古へ參居候、田代根は能朱出候に付、居住候て椀を作候由、根來之正眞は、朱わんを紙にて拭候へば、紙に朱付候由、右之段於京師咄被聞候由に候、先年上京之せつ、肥後八代放生會之內行懸り、宿亭主より料理を出候に付、根來手筋之黑椀にて候故、珍敷見置、後に酒抔出し、亭主も出候に付、先き之椀を尋候得者、八代より二三里奥に一村有之、右椀を作り候、本は根來山之者參居候て、椀を作候、其子孫今にわんを作り候由、咄致候、左候へば、方々國々へ參居たると見へ候、

〔嬉遊笑覽器用二下〕根來は、そのかみよき朱ぬりを玄たる處なり、○略中薩摩椀はわろかりしを、鷹筑波に、さつま椀花ぬりはたゞのり地かな、薩摩守忠度を隱したり

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕盌○略中

以人名爲名

椀木地以欅爲上、○略中其形有宗和椀、遠江椀、

○按ズルニ、宗和椀ハ金森宗和ノ創製スル所ニシテ、今常ニ用ヰル椀ハ卽チ是ナリ、遠江椀ハ遠江守小堀政一ノ創製スル所ニシテ、横ニ糸目アル椀ナリ、

〔槐記〕享保十一年霜月四日、御茶、御會席　食椀汁器宗和形カウダイナリ

〔櫻塢漫錄〕南部椀、又秀衡椀ともいふ、其始詳ならずと雖も、土人の口碑によれば、藤原秀衡の創意よりいでしものなりとぞ、其製內朱外黑にして、黑漆の上に朱を以て鶴花卉の類を描き、ところ